不登校の未然防止に向けて
～特性に応じた支援と有効性の検証を！「初期対応マニュアル」の活用の推進～

不登校児童生徒に対して様々な支援や取組を行っているところですが、市内小・中学校の不登校児童生徒数は近年増加傾向にあります。令和四年度においては、一月末時点で、既に昨年度の不登校児童生徒数を越えており、大きな課題となっています。

【表：令和４年度不登校児童生徒数】

①小学校（R3年度：146人）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
（人）	0	24	58	72	78	100	118	136	140	158

②中学校（R3年度：275人）

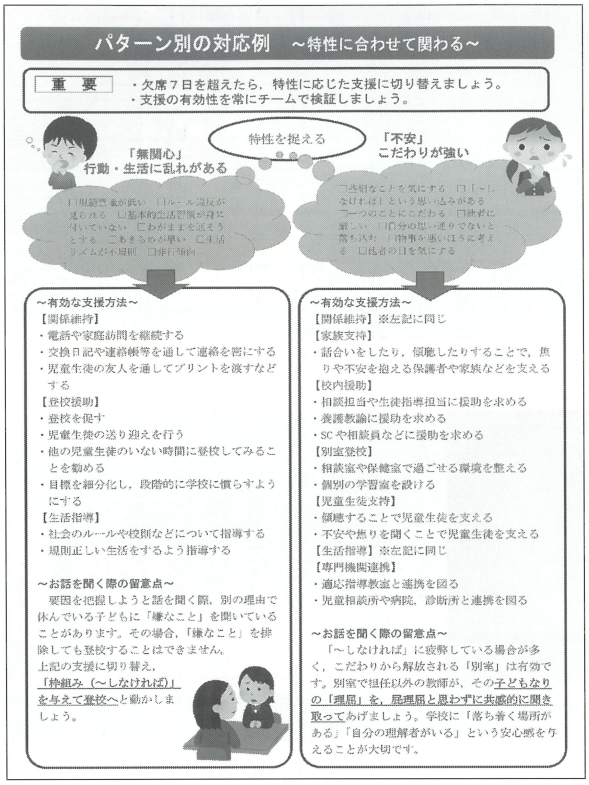
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
（人）	0	74	135	161	173	198	229	260	275	295

「欠席7日」を超えたら特性に応じた支援を！

そこで盛岡市では、令和三年度不登校対策の具体的な方策として「不登校未然防止初期対応マニュアル」を策定しました。

策定したマニュアルは、不登校を未然に防ぐための早期発見や初期対応のポイント、欠席を長期化させないための適切な組織対応と多様な取組について示しています。

【図：「初期対応マニュアル」（P 13）】



本マニュアルを活用し、適切な組織対応によって、初期の段階で回復させることができた好事例も多く報告されています。

しかし、早期に対応を始めても、欠席が長期化する場合は、児童生徒の特性により何らかの困難や不適応が生じ、自力で処理できず、周囲の適切な援助が得られていない状況であることが考えられます。自力で立ち向かう力が少しでも強く、周囲の援助もしやすいうちに、一日でも早く対応したいものです。まずは児童生徒の特性を捉え、特性に応じた支援に切り替えていくことが大切です。（図参照）

「無関心」の傾向が見られる児童生徒の場合、「枠組み（～しなければならない）」を与えて登校へと動かしましょう。例えば、「運動会参加のために練習だけは出よう」「放課後に文化祭作品を仕上げよう」「必ず○時までに別室登校しよう」等。「それならできそうだ」と思える課題に調整し、困難を乗り越えやすいように支援しましょう。困難は学校生活の一部（特定の友達・教科・行事が苦手等）であるにもかかわらず、全てから逃避（＝欠席）しようとしているケースの場合は、どうすればできそうか本人と条件を整え、「必ず登校しなければならない」という意識を強める働きかけを継続しましょう。

対して、「不安」の傾向が見られる児童生徒の場合、自分自身による登校刺激や枠組みに疲弊している場合が多いことから、枠組みから解放される別室は有効です。特有のこだわりが周りに理解されない困難さを抱えている場合には、その子なりの理屈を受け止める理解者の存在が必要です。適応できない苦しさが身体症状（頭痛・腹痛等）に現れるケースでは、医師から無理をさせないよう助言される場合もありますが、医師の助言は症状を改善させるための助言と受け止め、症状が回復した際、円滑に学校生活に戻れるような支援は、保護者の理解のもと継続することが大切です。

支援の有効性については複数の教職員で評価を！

特性の捉えや支援は適切か、定期的な評価により見直し・改善を図りましょう。その際、多面的な評価ができるよう、対応した教職員にさらに他の教職員を加えた評価チームを構成し、支援の有効性を協議することが有効です。

支援が有効に働いていない場合や対応する教職員の負担が大きく継続が難しい場合などは、新たな支援に仕切り直しましょう。特性を捉えるために慎重になっていると二次的な困難さが生じる場合があります。支援の実行、評価、改善をより多くの教職員で素早く行うこと、それが「組織で対応する」ということです。

児童生徒の不登校対策に関する研究

今年度、教育研究所では、市全体の課題である「児童生徒の不登校」に関する研究を行ってきました。研究発表大会の全体発表の場で、その内容について発表しましたが、ここでは、その概略を紹介します。研究の詳細については、発表大会資料を御覧ください。

各学校における不登校対応の現状について、「人的資源の活用」「環境的資源の活用」「学習保障」「予防的取組」「初期対応」「引きこもり対応」の観点から調査結果を整理・分析しました。その結果、小学校と中学校における対応に校種による特徴が顕著に見られました。

また、各学校の不登校の継続理由に対する認識については、「学校」「家庭」「本人」の観点から調査結果を整理・分析しました。その結果、本人に係る不登校要因が多く見られました。同時に、**学校や家庭に係る要因も、児童生徒の不登校に大きく影響している**ことが分かりました。

さらに、各学校が抱える不登校対応の難しさについても、「学校」「家庭」「本人」の観点から、調査結果を整理・分析しました。その結果、学校の立場から見たそれぞれの観点の難しさから、学校の不登校対応の限界を感じ取ることができました。

その他に、各学校における特設教室の設置や運営の状況、不登校児童生徒とコロナの関係、不登校対応における取組の工夫についても調査しました。**特設教室**は、昨年度の不登校に関する研究でも示した通り、**不登校の生徒数が多い中学校が設置**しており、支援員等による運営が中心となっています。

阿部専門研究員による発表の様子

各学校、それぞれが不登校対応において、様々な工夫ある取組を行っています。今回は、その中から、盛岡市立城南小学校の情報共有の仕方の工夫を取り上げました。**不登校児童の状況を数値によって見える化し、誰もが短時間で客観的に把握できる**ようにしているのが特徴です。

今回の調査では、各学校が校内の人的・環境的資源を活用して、真摯に粘り強く不登校の未然防止や初期対応、学習保障、引きこもり対応等に取り組んでいることが分かりました。同時に、不登校対応の難しさや学校だけの対応の限界も見えてきました。

次年度は、本調査結果を不登校対応の改善につなげるための方策についての実践的な研究に取り組み、来年一月の研究発表大会でその成果を発表する予定です。

「ひろばモリーオ」

「ひろばモリーオ」は、子どもたちが安心して過ごし、仲間とのふれあいや体験活動などをとおして、自分たちの居場所をつくるとともに、自己有用感を高め、自立して生きていくための力を育むことができるように、スタッフが日々サポートしています。

市内に二か所（青山教室、仙北教室）設置されており、それぞれの教室で、多くの子どもたちが楽しく生活しています。

「関係機関との連携・協力」が対応の一つとして本研究でも挙げられております。対応策の一つとして、モリーオへの通級を考えてみませんか。

盛岡市子ども科学館での体験活動の様子

3　「不登校傾向児支援シート」について

（1）スケールについて

ア　不登校の実態をとらえる観点を「登校手段」「登校頻度」「滞在時間」「滞在内容」「対応場所」の５観点とする。

イ　それぞれの観点を４段階（１～４点）で評価する。（合計 20 点）

ウ　表記以外の状況になった場合はその都度確認する。

【スケール】

		1	2	3	4
①	登校手段	引きこもり	迎えに行く	家の人と一緒に	一人で、友達と
②	登校頻度	月０～２	週１～２	週３～４（遅刻常習）	ほぼ毎日
③	滞在時間	30 分未満	１～２時間前後	半日程度	１日
④	滞在内容	好きなことをする	好きなこと＋学習	学習＋好きなこと	学習
⑤	対応場所	不定（気分次第）	保健室か学習室	学習室	教室

【シート例】

NO1（児童氏名）　対応者（教員氏名）

	前週の得点	所見
①	4	滞在時間をもう少し伸ばしていくことについて提案中。反応は悪くない。
②	3	
③	2	
④	4	
⑤	3	
計	16	

〈学習室〉

NO2（児童氏名）　対応者（教員氏名）

	前週の得点	所見
①	1	直近の１週間は登校できず。生活リズムは崩れていない。
②	1	
③	2	
④	3	
⑤	4	
計	11	

〈教室・学習室・保健室〉

NO7（児童氏名）　対応者（教員氏名）

	前週の得点	所見
①	3	登校時刻は放課後で固定化している。突破口が見えない。まずは登校日数確保を優先に。
②	3	
③	1	
④	1	
⑤	1	
計	9	

〈保健室・教室〉

NO8（児童氏名）　対応者（教員氏名）

	前週の得点	所見
①	4	遅刻は固定化しているが、母親からの遅刻連絡もあり、現状では安定している。
②	3	
③	4	
④	4	
⑤	4	
計	19	

〈教室〉

「不登校傾向児支援シート」の一部